

大瀛の三業帰命説批判——管見『真宗安心十論』——

西原 法興

大瀛の『真宗安心十論』(寛政十年・一七九八。以下『十論』)は、十箇条の問答形式で構成されており、その内容は欲生帰命説並びに三業帰命説の双方を論駁するものである。前著の『浄土真宗金剛鉋』(以下『金剛鉋』)と同様、双方の論難配分はほぼ同分量である。

蓋し『金剛鉋』を補完する目的を有するものと考えられ、随処に『金剛鉋』では未表現の説示が散見するが、其点の論及が『十論』の最大の目途であろう。即ち上巻では、第二論・第四論及び第八論で(一)浄土異流西山義との相違を継々と論述する項と、下巻では第九論の(二)三業帰命説十失を説論する箇所が着眼点であろう。

(一)西山でも真宗と同様に他力を説くので識別が困難かも知れない。以下大瀛の理解によると、西山の意では往生行は弘願仏体の大行であるので、全く機の造作は必要がないという。しかしその弘願で全たすけに預かるには、機の側の発願より帰入しなければ、弘願の御たすけの益に預かることは出来ないのである。願行具足の法と云うのも、観門の教えによつて発願の心が起こり、三心具足して弘願を尋ねることが出来る能帰の心である故に、これを願(南無)という。この能帰の願がなければ、弘願へは能入出来ない為に、機からと仏からと持ち合わせて願行具足すると説くのが西山教義である。

一方真宗において願行具足というのは、仏の大願大行なのである。願といえども、機の願力を募るのではない。仏願力

のみで具足していると示すのが、弘願の本意なのであるとする。よつて南無は三心であることには違いないが、その三心にも元来仏の方で成就された上で、これを衆生に名号として廻向されるのである。即ち最早衆生の方から造作して能帰の三心を建立する必要もない。ただ信樂一心に至心欲生の二心は撰在しているのである。そこで機受の辺では三心を一信樂におさめるのが真宗の極致と言えよう。西山と真宗は微差というかも知れないが、実は自力他力の大きな差異があるのだと論じている。また大瀛は三業帰命説を西山教義から波累するかのよう論述しているが、無論それは西山教義を批判する為の論法ではなく、むしろ真宗内部にあつて他流教義を混雑した過失を教諭せんが為であった。三業帰命の論理的根拠を奪うために、西山と真宗との相違点を指摘し異解者を矯正する意図が存在したのである。

(二)また『十論』下巻第九論において三業帰命の十失(①願成不摂②自宗相違③自語相違④信名不尽⑤決定不俱⑥撰取錯所⑦一念無実⑧相続義乖⑨機執不亡⑩信心不一)を設定している。例えば⑦の一念無実失は、信一念の本意に反する失である。信の始めには仰信、次に願求の念、最後に往生を決信する念というように、三業帰命は多重多念である。また⑧相続義乖失では、信心の相続とは初一念の安心を一生涯相続することであるのに、三業帰命の相続は、一生涯たすけたまえと作意して、いつまでも決定心が得られない失があるとする。⑨機執不亡失では、信機信法の外に作意を立てて一念帰命として往生を得ると説く。如来の願力をたのまずして、自ら作意する一念の力によ

って往生をのぞむので自力の執心をあてにする失があるのだと教諭している。これらの原因は、すべて「たのむ」の語を信心以外にとり、別途に作意運想する事から惹起される過失であると結論するのである。

『金剛鐱』・『論衡篇』と同様に「十論」でも、願生帰命説では欲生は「信樂の相」であると力説することに対峙して、「信樂の義別」又は「信樂の異名」であると論断している。

大瀛の三業帰命説批判は、惑乱の原由である『願生帰命弁』への批難であると同時に、当時の異解者に対する教諭でもあった。たのむは信心を意味し、その信心は「聞其名号信心歡喜」の信であって、往生の真因には三業帰命は一切介在しないと断するのである。

清沢満之の宗教哲学における宗教起源論について

ベルナット・マルティ・オロバル

清沢満之は『宗教哲学骸骨』(以下『骸骨』と略す)の冒頭で、宗教起源に関する自身の見解を、「宗教が吾人の間に存するは如何なる理由あるによるかと言ふに古来宗教起源の論区々にして一定せずと雖ども畢竟するに吾人に於て之を提起すべき性能あるに由るなり 此性能を名けて宗教心といふ」(『清沢満之全集』巻一、五一六頁。以下『全集』と略す)と説明した。ヨーロッパの十九世紀後半には、宗教起源の追究は重要な課題となり、その議論は日本でも明治初期から知られ、知識人の間で論じられていた。概ね、ハーバート・スペンサーの説を中心としてその問題は考察された。スペンサーの宗教起源説を要約

すれば、人類は元々、宗教を知らず、それは思考の進化、特に靈魂への信心から、徐々に生み出された現象であるというものである。一方、清沢の宗教哲学諸資料を調査すると、その説は基本的にはスペンサーの説とは対立している。清沢にとって、自身の研究分野である宗教哲学は経験に依拠せず、哲学と同様に、道理に基づくものとなる。したがって、宗教の起源を考察するに当たっても、「宗教心」なしには「宗教」という現象は発生し得ないというものである。それ故、「宗教心」の存在は宗教にとって必須条件である。清沢によれば、宗教は人間が雄大な自然環境に日々触れ合ううちに、おのずから生まれたものである(『全集』巻一、二〇六七頁)。更に、清沢の宗教起源論がどのような思想の影響下で構想されたかを検討するに当たっては、西洋思想と仏教教理、両伝統との関連を考察する必要があると考える。先ず、マクス・ミュラーからの思想的影響に注目したい。清沢が所持していたミュラーの著作二冊、『宗教学入門』及び『宗教の起源と発展講義』(『全集』巻九、三四五頁)における宗教起源論に関する叙述を具体的に分析することによって、それが清沢の説と近似していることが分かる。例えば、『宗教学入門』に説かれているように、人間にはおのずから「信仰の能力」、無限なるものを認知することができる性能が備わっているという論法は清沢が主張した生得的な「性能」である「宗教心」と類似するものである(マクス・ミュラー(塚田貫康訳)『宗教学入門』見洋書房、一九九〇年、一二―一三頁)。更に、『宗教の起源と発展講義』を分析すると、清沢の説を連想させる論述が見られる。例を挙げれば、そ